

令和元年6月20日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26243007

研究課題名(和文) 'contents tourism' を通した文化の伝播と受容に関する国際比較研究

研究課題名(英文) International Comparative Research on the Spreading and Reception of Culture through Contents Tourism

研究代表者

P・A SEATON (Seaton, Philip)

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：70400025

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 29,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、コンテンツツーリズムを「物語、キャラクター、ロケ地など、ポピュラーカルチャー作品を構成する創造的要素によって、全体的あるいは部分的に動機づけられた旅行行動(なお、ここでいうポピュラーカルチャー作品とは、映画、テレビドラマ、マンガ、アニメ、小説、ゲームなどを含む)」と定義したうえで、この定義に当てはまる国内外の事例を取り上げ、日本で開発された理論・方法論を応用することで分析を行った。その結果、日本のポップカルチャーが誘発する旅行行動のメカニズムを明らかにした。これら成果は、英文専門書2冊、英文学会誌特集2冊を含む計100点以上の業績として国内外で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の観光研究では、ポップカルチャーファンの旅行行動について、メディアフォーマット毎に分類した枠組みで分析が行われてきた(例えば、フィルムツーリズムなど)。本研究では<メディア>ではなく<コンテンツ>に焦点を当て、ファンとコンテンツビジネスと地方自治体との関係性を分析する方法を開発した。その成果は、国際学会・学術雑誌を通して発表し、メディアミックス時代に有効な手法として、国際的な注目を集めた。また本研究では、持続可能なコンテンツツーリズム開発の有り方について、関係者間の共通利益を得るための課題を精査し、具体的な政策案も提示するなど、社会的にも意義のある成果も得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This research project defines contents tourism as “travel behaviour motivated fully or partially by narratives, characters, locations and other creative elements of popular culture forms, including film, television dramas, manga, anime, novels and computer games”. In over 100 research outputs, including 2 books and 2 journal special editions in English, the research group analyzed many examples of contents tourism in Japan. Using contents tourism theory and method as developed in Japan, the group also reexamined examples of tourism induced by popular culture outside Japan that had previously been discussed as examples of format-based tourism, e.g. film tourism. In the digital age, focusing on “the contents” and how they connect the three main tourism actors (fans, contents businesses, and local authorities) offers methodological advantages and is being increasingly adopted by international scholars. The project also offers policy recommendations for sustainable contents tourism.

研究分野：メディア・文化学、観光学

キーワード：コンテンツツーリズム ポップカルチャー 観光学 メディア

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、ポップカルチャーが誘発する観光について、国内外での注目が高まるようになった。ファンがメディアを通して作品(小説、映画、ドラマ、ゲームなど)を消費した後に、作品ゆかりの地に旅行する行動が多様化し、地域や旅行産業からビジネスチャンスとして意識されるようになったのである。こうした旅行行動を指す語として、英語圏には<フィルムツーリズム>や<リテラリーツーリズム>などが存在してきたが、日本では2005年にコンテンツツーリズムという語が登場した。北海道大学メディア・コミュニケーション研究(当時)のシートン・フィリップ(研究代表者)と同観光学高等研究センターの山村高淑は、この台頭するコンテンツツーリズム現象に着目し、2010年より共同研究を開始した。山村は日本語によるコンテンツツーリズム研究のパイオニアの一人であり、シートンはメディア・文化学の専門家である。さらにコンテンツツーリズム概念を国際的視座から検討するために、英語圏のフィルムツーリズム研究の第一人者、Sue Beeton 教授とも共同研究を開始し、2013年には英語による初めての<コンテンツツーリズム>に関する学術論文を発表し、同概念を広く世界に紹介した。こうした背景により、2014年度から5年間、科研費の助成を得て本研究プロジェクトが実施された。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の二点である。第一に、コンテンツツーリズムをポップカルチャーの伝播と受容の側面から捉え直すことを通して、そうしたツーリズムが他者理解に果たす役割を明らかにすること。第二に、これを踏まえて、日本の置かれている地政学上とりわけ国際的な相互理解が求められている東アジア地域に着目し、日本のコンテンツをきっかけとしたコンテンツツーリズムが、日本の文化的安全保障に向けてどのような可能性と課題を有しているのか考察を行うこと。なお本研究は、申請者がそれまで国際的にも先駆的に実施してきた国内外のコンテンツツーリズムの動向調査の成果を、学際的・国際的研究として大きく発展させることにより実施される。

### 3. 研究の方法

本研究では、ファン、コンテンツビジネス、地方自治体という三者の関係について分析を行う。コンテンツツーリズムにおけるこの三者関係は、コンテンツの介在により構築される。ファンは、コンテンツビジネスが生み出した作品を消費する。コンテンツビジネスは、個人の作者から多国籍企業まで多岐にわたる商業コンテンツ製作者として定義される。またファンは、訪問先のコミュニティや目的地といった、地方自治体とも交流する。こうした地方自治体は、コンテンツツーリストに提供される様々な観光事業を規制したり管理したりしている。そして最後に、コンテンツビジネスと地方自治体は協力関係にある。地方自治体は、製作者が行うロケーション・ハンティングへの協力、共同プロモーション等の協力を行う一方、コンテンツビジネスは、作品公開後、地方自治体が観光地や商品にロゴ、商標、キャラクター画像を使用することにに対し許諾を与える。

こうした三者間の関係性の実態を明らかにするため、研究グループのメンバーは様々な方法でデータ・資料収集を行った。具体的には、ファンやクリエイター、自治体関係者に対するインタビューやアンケート調査を中心に実施した。さらに、<物語世界>の理解・分析を行うために、研究者自身が、作品の視聴・分析を行った上で、作品ゆかりの地において、行為者行動観察・分析を中心とした実地調査を行った。さらに、自治体、JNTOなどの観光客入り込み数などの統計データも利用し、コンテンツツーリズム現象の規模の推計も行った。最後に、コンテンツツーリズム現象の特徴を理解するため、関連文献の調査を行い、別のツーリズム事例との相違点について考察を加えた。

以上のような方法を用い、本研究では、具体的な複数のコンテンツツーリズム事例に対し、ファン、コンテンツビジネス、地方自治体という三者それぞれの実践の特質と三者間の関係性構築の実態を把握することで、コンテンツツーリズムの発展的再定義に資する知見を得ることを目指した。なお、本研究においては、21世紀における<旅の文化>の重要な側面としてのコンテンツツーリズムの社会文化的な特質と意義を探ることに重点を置いているため、経済効果の評価・分析には重点を置いていない。

### 4. 研究成果

メディア作品が誘発する観光については、従来、海外を中心に、フィルムツーリズム、リテラリーツーリズム等、メディアフォーマットを中心に分析をするアプローチが採られてきた。しかし、デジタル化、情報化が進展する中で、<物語世界>のコンテンツは複数の作品・メディアを通じて発信されるケースがますます増え、理論上の課題が表面化する。すなわち、例えば<映画ロケ地ツーリズム>の場合、原作の小説の役割・影響をどう分析するかという問題がそれである。コンテンツ産業においてメディアミックスが活発に行われてきた日本では、1990年代頃より、世界に先駆けて<コンテンツ>と<メディアミックス>の役割が議論され、2005年には国土交通省等の「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査報告書」によって「コンテンツツーリズム」という概念が登場するに至る。21世紀の社会においては国や文化を問わず、ますますデジタル化、情報化が進展していくであろうことを踏まえ

ると、こうした日本発のコンテンツツーリズムの概念は、日本以外の社会にも適用可能な方法論として発展させることが可能であると考えられる。こうした問題意識から、2013年にビートン・山村・シートンは英文の共著論文を発表し、初めて英語でコンテンツツーリズムを定義し、同概念を日本以外の観光学研究者に紹介した。本研究5年間の成果は、この論文を出発点として、コンテンツツーリズムに関する国際的に汎用可能な理論と方法論を提示したことにある。

その成果とは具体的に以下の二点に集約できる。第一に、国内の事例を中心に「コンテンツツーリズム研究」の理論と方法論を開発した点、第二に、その理論と方法論を海外事例に適応し、日本発の理論を用いて各国のコンテンツツーリズム事例を再検討した点、である。プロジェクト前半(2014年～2017年)では、主に「地域研究・日本研究」の形で複数の論文を発表した(下記の論文～、書籍～)。さらにプロジェクト後半(2017年～2019年)では、「観光学、メディア・文化学」の形で海外の事例に焦点を当てた成果物を発表した(下記の論文～、書籍～)。

このように研究期間中に多くの成果物を国際的に発表した結果、コンテンツツーリズムと日本の観光事例に対し、世界の研究者から注目が集まるようになるとともに、フィルムツーリズムなど英語で主流であった表現と並び、コンテンツツーリズムも英語圏の観光学研究において一般的な概念となりつつある。さらに、研究チームが発表した論文の引用数は「地域研究」分野において高い引用率を記録することができた(下記の論文参照)。それと比べて観光学研究分野での論文引用数は低いものであるが、日本における外国人旅行者の急増に伴い、日本の観光学研究にも注目が集まっており、そうした中で研究成果をアピールできた点は時宜を得たものであった。研究期間を通して得たこうした成果を今後発展させていくためには、依然としてコンテンツツーリズム研究の蓄積が、日本・アジア地域中心である点を克服する必要がある。とりわけ、これまでフィルムツーリズム研究等で先行している欧米の事例について、コンテンツツーリズムの理論を用いた研究の蓄積が重要となろう。本研究で得られた知見が国内外で活用されることで、今後の国際的なコンテンツツーリズム研究のさらなる発展を期待したい。

#### 5. 主な発表論文等

下表に示す通り、毎年の報告書で記した研究業績の累計は100本を超えている。したがって、以下、研究活動の全体像がわかるよう、主な学会・出版物の種類・カテゴリーで整理を示す。

	2014	2015	2016	2017	2018	計
査読付き論文	6	0	4	7	7	24
査読無し論文	1	0	3	0	0	4
研究発表	14	6	17	8	24	69
図書(単著、編集)	1	2	3	0	0	6
図書(チャプター)	0	0	0	1	1	2

[雑誌論文](計28件)

代表・分担者が個人的に論文を発表しているが、グループとしての主な業績は、二つの国際学会誌(Scopusに記載)の特集号を刊行したことである。

*Journal of War & Culture Studies* Special Edition Vol. 12.1

Philip Seaton, “War, Popular Culture, and Contents Tourism in East Asia”, 査読付き, *Journal of War & Culture Studies* 12.1 (2019) pp. 1-7.

<https://doi.org/10.1080/17526272.2018.1431856>

Takayoshi Yamamura, “Cooperation Between Anime Producers and the Japan Self-Defense Force: Creating Fantasy and/or Propaganda?”, 査読付き, *Journal of War & Culture Studies* 12.1 (2019) pp. 8-23. <https://doi.org/10.1080/17526272.2017.1396077>

Kyungjae Jang, “Between Soft Power and Propaganda: The Korean Military Drama Descendants of the Sun”, 査読付き, *Journal of War & Culture Studies* 12.1 (2019) pp. 24-36. <https://doi.org/10.1080/17526272.2018.1426209>

Aleksandra Jaworowicz-Zimny, “Nazi Cosplay in Japan”, 査読付き, *Journal of War & Culture Studies* 12.1 (2019) pp. 37-52. <https://doi.org/10.1080/17526272.2018.1427015>

Akiko Sugawa-Shimada, “Playing with Militarism in/with Arpeggio and Kantai Collection: Effects of shoujo Images in War-related Contents Tourism in Japan”, 査読付き, *Journal of War & Culture Studies* 12.1 (2019) pp. 53-66. <https://doi.org/10.1080/17526272.2018.1427014>

Philip Seaton, “Kamikaze Museums and Contents Tourism”, 査読付き, *Journal of War & Culture Studies* 12.1 (2019) pp. 67-84. <https://doi.org/10.1080/17526272.2018.1424432>

Japan Forum Special Edition Vol. 27.1.

Philip Seaton and Takayoshi Yamamura, “Japanese Popular Culture and Contents Tourism”, 査読付き, *Japan Forum* 27.1 (2015) pp. 1-11. DOI 10.1080/09555803.2014.962564

Takeshi Okamoto, “Otaku Tourism and the Anime Pilgrimage Phenomenon in Japan”, 査読付き, *Japan Forum* 27.1 (2015) pp. 12-36. DOI 10.1080/09555803.2014.962565

Akiko Sugawa-Shimada, “Rekijo, pilgrimage and ‘pop-spiritualism’: pop-culture-induced heritage tourism of/for young women”, 査読付き, *Japan Forum* 27.1 (2015) pp. 37-58. DOI 10.1080/09555803.2014.962566

Takayoshi Yamamura, “Contents tourism and local community response: Lucky star and collaborative anime-induced tourism in Washimiya”, 査読付き, *Japan Forum* 27.1 (2015) pp. 59-81. DOI 10.1080/09555803.2014.962567

Philip Seaton, “Taiga dramas and tourism: historical contents as sustainable tourist resources”, 査読付き, *Japan Forum* 27.1 (2015) pp. 82-103. DOI 10.1080/09555803.2014.962568

特に は、大きなインパクトがあり、Japan Forum 史上一のダウンロード数を誇り、既に引用は 50 回に近づいている (2019 年 5 月現在)。

[学会発表](計 69 件)

69 回の研究発表については、以下四つのカテゴリーに分けることができる: A) 研究グループが主催者として行った国際シンポジウム、B) 複数の分担者が一緒に参加した国際研究発表会、C) 基調講演、D) その他、一般発表 (省略)。

#### A) 研究グループが主催者として行った国際シンポジウム:

Transnational Contents Tourism in Europe and Asia、東京外国語大学。発表者 13 名の論文は専門書(論文集)『Contents Tourism and Popular Culture Fandom: Transnational Tourist Experiences』で出版される予定 (2020 年)、2018 年 6 月 7 日~10 日。

British Association for Japanese Studies (Japan Branch) Mini-Conference: Civil Society, Tourism, Anthropology、北海道大学、2016 年 7 月 29 日~31 日。

CATS × 南砺市 × PARUS 連携フォーラム「地方発世界: 地方における文化・観光・事業の創造」、南砺市クリエイタープラザ(富山県南砺市)、2016 年 4 月 29 日~30 日。

第 3 回 CATS 観光創造研究会、北海道大学。プロシーディングズは「コンテンツ・ツーリズム研究の射程~国際研究の可能性と課題」として出版された(下記「図書」参照) 2015 年 3 月 15 日~16 日。

#### B) 複数の分担者が一緒に参加した国際研究発表会 (パネル発表など):

Travel and Tourism Research Association, Asia-Pacific Chapter Conference、香港、(Beeton, シートン, 山村)、2017 年 12 月 8 日。

American Anthropological Association 116th Annual Meeting、ワシントン DC、(山村, ジャン)、2017 年 12 月 1 日。

Contents Tourism: Creativity, Fandom, Neo-Destination、カリフォルニア大学バークレー校、(山村, 須川, ジャン, 妙木)、2017 年 3 月 10 日~11 日。

Joint East Asian Studies Conference、SOAS ロンドン大学、(シートン, 山村, 須川, ジャン)、2016 年 9 月 7 日~9 日。

Travel and Tourism Research Association, Asia-Pacific Chapter Conference、明治大学、(Beeton, シートン, 山村, 須川)、2015 年 12 月 4 日~6 日。

Association for Asian Studies、シカゴ、(シートン, 山村, 須川, ジャン)、2015 年 3 月 26 日~29 日。

Travel and Tourism Research Association Conference、ブルージュ、(シートン, Beeton)、2014 年 6 月 18 日~20 日。

#### C) 基調講演

Philip Seaton, “On the Trail of Shiba Ryotaro and Jane Austen”, W.G. Beasley Memorial

Lecture 2019、SOAS ロンドン大学、2019年3月13日。

Philip Seaton, "On the Trail of Samurai and Wizards: Defining "Success" in Contents Tourism". 16th International Conference on Japanese Studies. アテネオ・で・マニラ大学、フィリピン、2018年2月3日。

Takayoshi Yamamura, "Who creates 'Contents Tourism'? A new tourism model induced by pop culture in the age of mixed media", Contents Tourism: Creativity, Fandom, Neo-Destination、カリフォルニア大学バークレー校、2017年3月10日。

Takayoshi Yamamura & Kyungjae Jang, "Inheriting Contemporary Memories: The contentization of heritage and the heritagization of pop culture contents", International Conference on The Glocal Culture and Regional Development、ソウル大学、2016年11月10日。

Philip Seaton, "Pop Culture, History, and "Contents Tourism" in Japan", カーディフ大学、2016年11月10日。

Philip Seaton, "Islands of Memory: War, popular culture and contents tourism in the Inland Sea", ケンブリッジ大学、2016年11月18日。

Philip Seaton, "Pop Culture, History and "Contents Tourism" in Japan", 国際交流基金レクチャーツアー(カナダ) レニソン大学(10日) Ted Rodgers School of Management(11日) ブリティッシュコロンビア大学(14日) 2016年3月10日~ 2016年03月14日。

〔図書〕(計8件)

Takayoshi Yamamura and Philip Seaton (eds), Channel View Publications, *Contents Tourism and Popular Culture Fandom: Transnational Tourist Experiences* (in press).

Philip Seaton and Takayoshi Yamamura, Routledge, *Japanese Popular Culture and Contents Tourism*, 2016, 118 pages.

Philip Seaton, Takayoshi Yamamura, Akiko Sugawa-Shimada, Kyungjae Jang, Cambria Press, *Contents Tourism in Japan: Pilgrimages to "Sacred Sites" of Popular Culture*, 2017, 326 pages.

山村高淑、シートン・フィリップ、張慶在、平井健文、鎌水孝太(編) CATS 叢書第8号「コンテンツ・ツーリズム研究の射程-国際研究の可能性と課題」, 2016年、253ページ

西川克之、シートン・フィリップ、山村高淑 [編] 北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 「コンテンツツーリズムの理論と実例」, 2015年、56ページ

〔産業財産権〕

無し

〔その他〕

さらに、研究プロジェクトの一環として、オープンアクセス学会誌 International Journal of Contents Tourism をウェブジャーナルとして開設した。科研費期間中、論文1本、研究ノート10本、書評1本を刊行した。ウェブサイト：<https://contents-tourism.press>

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：山村 高淑

ローマ字氏名：Yamamura Takayoshi

所属研究機関名：北海道大学

部局名：観光学高等研究センター

職名：教授

研究者番号(8桁)：60351376

研究分担者氏名：須川 亜紀子

ローマ字氏名：Sugawa Akiko

所属研究機関名：横浜国立大学

部局名：大学院都市イノベーション研究院

職名：教授  
研究者番号（8桁）：90408980

研究分担者氏名：張 慶在  
ローマ字氏名：Jang Kyungjae  
所属研究機関名：広島大学  
部局名：総合科学研究科  
職名：講師  
研究者番号（8桁）：50782140

研究分担者氏名：妙木 忍  
ローマ字氏名：Myoki Shinobu  
所属研究機関名：東北大学  
部局名：国際文化研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：30718143

研究分担者氏名：山田 義裕  
ローマ字氏名：Yamada Yoshihiro  
所属研究機関名：北海道大学  
部局名：メディア・コミュニケーション研究院  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：40200761

研究分担者氏名：西川 克之  
ローマ字氏名：Nishikawa Katsuyuki  
所属研究機関名：北海道大学  
部局名：メディア・コミュニケーション研究院  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：00189268

研究分担者氏名：岡本 健  
ローマ字氏名：Okamoto Takeshi  
所属研究機関名：奈良県立大学  
部局名：地域創造学部  
職名：講師  
研究者番号（8桁）：20632756

研究分担者氏名：シドル・リチャード マシュー  
ローマ字氏名：Siddle, Richard Matthew  
所属研究機関名：北海道大学  
部局名：メディア・コミュニケーション研究院  
職名：特任教授  
研究者番号（8桁）：70625277

## (2)研究協力者

研究協力者氏名：ビートン スー  
ローマ字氏名：Sue Beeton

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。